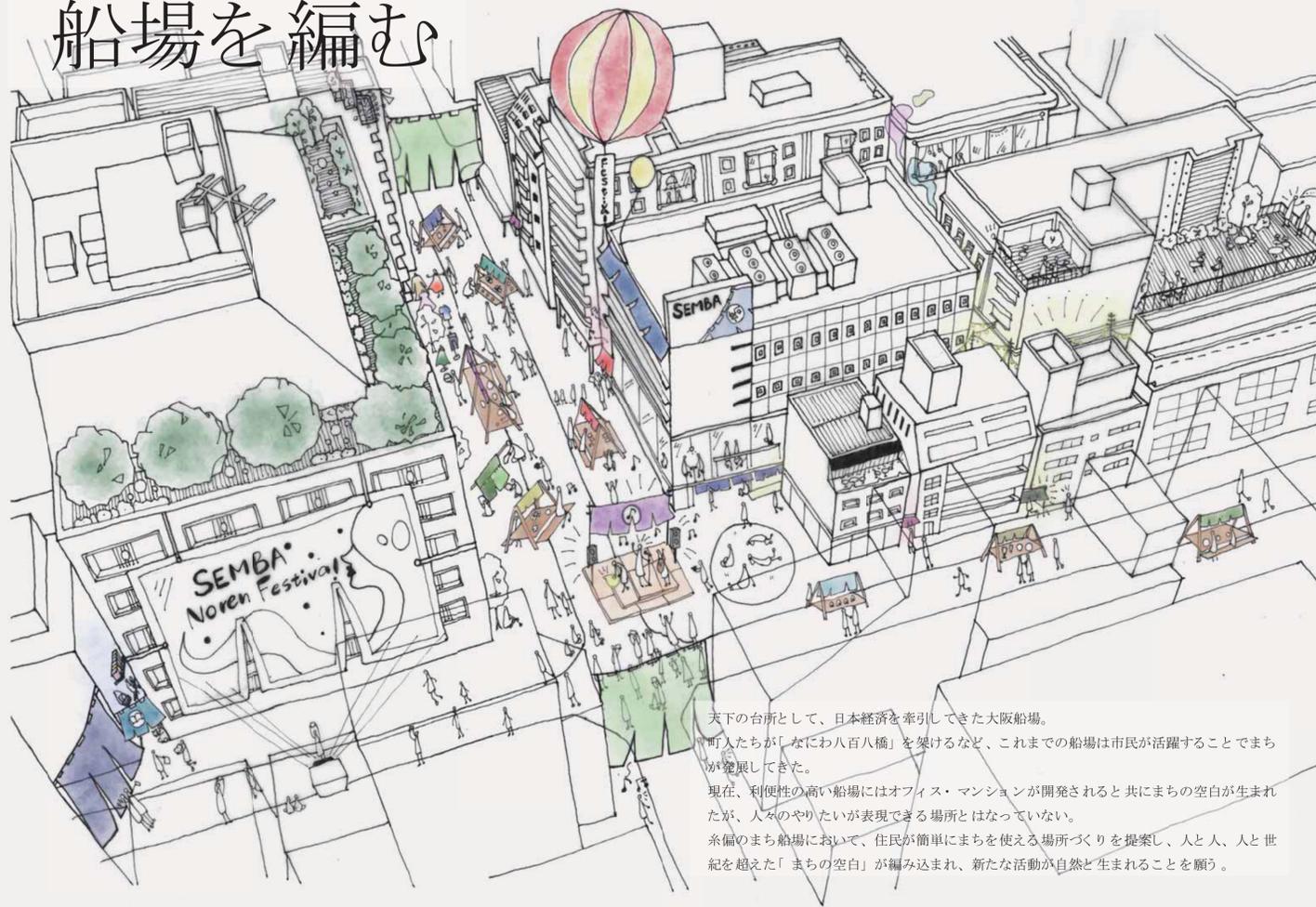


船場を編む



天下の台所として、日本経済を牽引してきた大阪船場。町人たちが「なにわ八百八橋」を架けるなど、これまでの船場は市民が活躍することでまちが発展してきた。現在、利便性の高い船場にはオフィス・マンションが開発されると共にまちの空白が生まれたが、人々のやりたいが表現できる場所とはなっていない。米偏のまち船場において、住民が簡単にまちを使える場所づくりを提案し、人と人、人と世紀を超えた「まちの空白」が編み込まれ、新たな活動が自然と生まれることを願う。

1. 背景



江戸時代は三井越後呉服店をはじめ、様々な商店がのれんを連ね、その後も繊維問屋の存在を背景に、繊維工業都市としての地位を固め、発展していく。



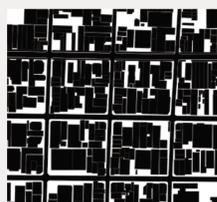
豊臣秀吉により造られた基盤の目のまちには太閤下水が通され、これが町の境に。この下水は各町内の町衆によって管理され、コミュニティが形成されていた。現在も街の「隙間」して空間だけが残されている。



1939年、延べ床面積の増加と、歩行者空間の確保のために行われた船場後退線。実際は後退の有無による壁面線の不一致や個人の物が置かれ、公共性が失われている。



戦後の総合設計制度では、建物足元に公開空地を設けると、容積率を上げることができる。しかし、容積率につられてきた空間は人のための場所となっていない。

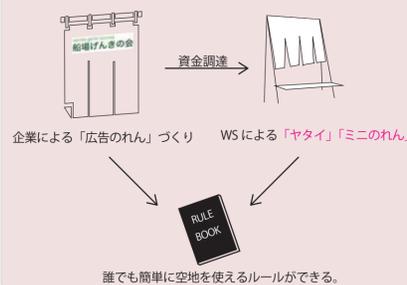


船場の建物と空地の図と地を反転させると、建てつまった中に太閤路地、船場後退線、公開空地の世紀を超えた多くの「空白」が隠れていることが分かる。

2. フェーズ

i. 街の空白を支える基盤づくり

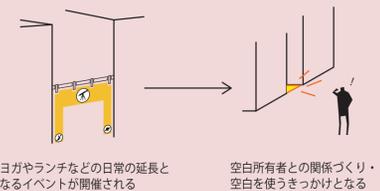
繊維の歴史を契機に企業と船場げんきの会が繋がり住民が参加できるまちづくりへと続く。



誰でも簡単に空地を使えるルールができる。

ii. 街の空白発見イベント

イベントに向け、船場げんきの会と空白所有者が繋がり、これまでの歴史ある空白が世紀を超え繋がり、使われる。



iii. 使われ始める空白

構築した関係やアイテムにより空白は更に使いやすい場所となり好循環を生み出す。



iv. 自由な使用と新たな活動の萌芽

船場と人・人と人が編み込まれ新たな活動は生まれ続ける。



■船場で生きるアイテムについて



ヤタイとミニのれん

人々の関心を都市・空白に向けるアイテムとしてのれん・ヤタイを用いる。かつての木村業や繊維業等、古くから船場に息づく生業を活かし、人々の活動の拠点を住民、企業自らの手で作り上げる。

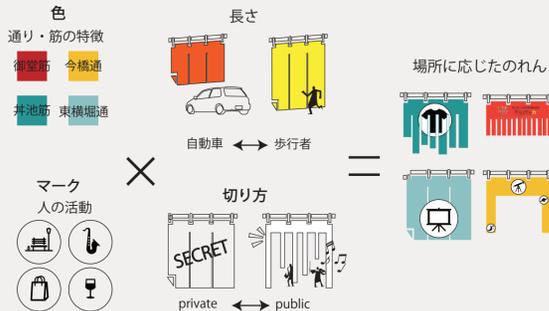


SBmap (Space Blank Semba map)

誰でも簡単に使えるため、空地を Web 上でオープンデータ化。空白を利用する際、ネットで利用予約が可能で、利用後に空間に関する口コミを行う。逆に、空白所有者が利用者を評価することができ、利用者と貸し手が互いに評価を行うことでより良い空間の使いかたへと導かれる。

■のれんについて

4つの要素によって多彩な空間を表現し、まちの特徴・活動場所を視覚化する。のれんの作成により「繊維業とまち」「住民とまち」が編み込まれてゆく。



「街の空白」で使うヤタイを通りかかりの人を巻き込み、ヤタイを製作するワークショップを行う。

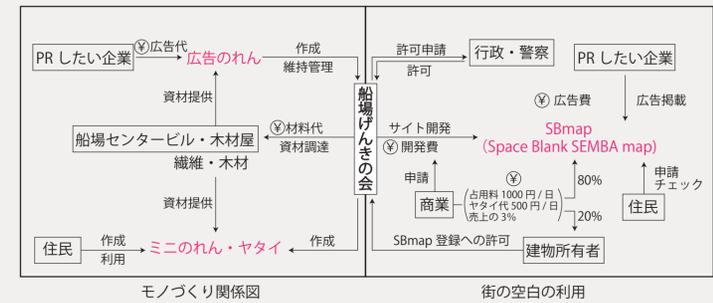


左は船場の店舗が会社と契約して、空地に出張で社員食堂を出している。右は園芸センターがフラワーアート体験を行い企業イメージ向上を図っている。通りで同じ色の暖簾をかけることにより、視覚的に通りらしさを演出する。

3. マネジメント

■関係図

船場げんきの会を中心として、「ここで活動するための基盤のモノづくり」と「街の空白を誰でもいっつも簡単に使えるような仕組みづくり」を進める。



■街の空白使用ルールの改正

まちの空白	公開空地	船場後退線	スキマ
既存	歩行者の通行と利用が可能 (非営利のみ)	歩行者空間の確保	民有地や形状の問題から占用不可
新ルール	営利目的の利用も申請を行い必要に応じて使用料を払うことで可能とする。ただし、空白所有建物が営利目的の利用を行う場合は無料とする。		

■まちの空白使用の料金・所有者のメリットについて

営利	非営利目的	建物利用者・オーナー
1日 1000円 + 売り上げの3% (既存の店舗のオープンカフェ化は0円)	0円	<ul style="list-style-type: none"> 建物利用者 企業がモニターを行える 自社商品をアピールできる 社員の福利厚生への向上 社員食堂業者との提携 1F店舗のオープンカフェ化は無料 オーナー ・占用料の20%が入る